

# 第1回緊急下の妊婦から生まれた子どもの出自を知る権利の保障等に関する検討会 議事録

第1 日 時 令和5年（2023年）7月2日（日曜日）14：00～16：00

第2 場 所 慈恵病院マリア館4階会議室

第3 参加者

- 1 対 面：森座長、床谷委員、安保委員、石黒委員、藤林委員、傘委員、  
秋月委員、駒井委員、光安委員、古閑委員、蓮田健委員、  
蓮田真琴委員
- 2 オンライン：柏木委員、安發委員、姜委員、サンティアゴ委員、大場委員

第4 内容

- 1 開会
- 2 主催者挨拶  
蓮田慈恵病院長、木檜熊本市こども局長による挨拶がされた。
- 3 委員紹介  
事務局により委員紹介が行われた。
- 4 趣旨説明と慈恵病院の取組について  
蓮田委員による説明が行われた。
- 5 意見交換  
委員の意見交換が行われた。主な意見は、別紙のとおりである。
- 6 その他  
事務局からの事務連絡等があった。
- 7 閉会

第1回緊急下の妊婦から生まれた子どもの出自を知る権利の保障等に関する検討会  
意見交換で出た主な意見

【緊急下の妊婦に対する理解】

- 「こうのとりのゆりかご」に預け入れた人や内密出産を利用する人々は、親に出産したことを言うことは難しいが、生んだ子どもに自らのことを隠したいと思っているわけではない。
- 「こうのとりのゆりかご」に預け入れた人や内密出産を利用する人々にとって匿名であることがどのような意味があるかについて考えていくことが重要である。
- 「こうのとりのゆりかご」に預け入れた人や内密出産を利用する人々に愛着障がいや発達障がいがある傾向があると一般化することは、社会に誤解を与える可能性がある。
- 障がいがあっても周囲が支援してくれているときは問題は起きず、成育歴で色々な課題が重なりあったときに問題が出てくる。
- 情報を発信する時には、表現に配慮する必要がある。
- 障がいという個人の個性としてとらえるのではなく、ケアが足りないという社会の問題として訴えていくことが大事だ。障がいは社会モデルの観点で捉えるべき。
- 女性にとって内密出産に対するハードルが高くなりすぎないように、どのような状況にある人のための制度なのかに立ち返って考えるべきである。

【こどもに対する支援】

- 出自情報を聞く不安や怖さから知りたくないと思っている子どももいるが、そこから時間の経過の中で変化することがある。
- 告知される時点における子どもの受け入れる力がどれくらいかを支援者が考えて、伝えるべき内容を選択していかなければならない。

【真実告知について】

- 真実告知をされたときの周りの支えが必要である。
- 児童相談所が行った真実告知のアンケートにおいて、告知した者の割合が18%であったという結果については、預け入れられた子どもが受け入れられるだけの年齢に達していないことが背景にあるのではないか。

【制度について】

- 出自を知りたいと思う子どもがいる以上、その権利を制度化するための議論をして

いくべきである。

○子どもが出自を知りたいと思ったときに伝えることができる情報の管理が重要である。